地域からの信頼を礎に
廃棄物処理の在り方を変え、
資源循環に新たな未来を拓きます

大栄環境株式会社
代表取締役会長
金子 文雄

新経営体制への移行は グループの成長加速への一歩

2026年6月25日の定時株主総会をもって、当社グループは新たな経営体制へ移行しました。この決断の背景には、当社グループ自身の変化があります。

事業の成長とともに組織は拡大し、M&Aによってグループ会社数も増え続けてきました。さらに業界全体が転換期を迎える中、グループの成長を加速させるには、変化に対応できる体制への移行が不可欠です。今こそ、次世代のリーダーに経営を託すべきタイミングだと判断しました。

後任の下田守彦は、上場準備の初期段階から私とともに経営に携わり、特に投資家対応や中期経営計画の策定・推進において中心的な役割を担ってきました。当社グループの方向性や価値観を深く理解しており、私も安心してバトンを託すことができます。

下田がグループを牽引する一方で、私は会長として新体制が円滑に機能するように支えていきます。さらに、本来の上場目的であるガバナンス強化を継続的に実効性あるものとするため、取締役会の一員として執行を監督し、グループのガバナンス体制を一層強固なものにしていきます。

創業時から変わることのない 信頼を重んじる価値観

当社グループの根幹にある価値観は、サステナビリティ基本方針に掲げる「未来は、信頼から生まれる。」という言葉に集約されています。

当社グループの事業は、地域や自治体からの理解なくしては成立しません。創業当初、廃棄物処理施設の建設にあたり、地域から激しい反対の声が上がりました。しかし、創業者が中心となって地域住民と粘り強く対話を重ねたことで、理解と信頼を得て運営を開始することができました。事業が広がるにつれ、かつて反対していた住民の方々も次第に支援者へと変わっていきました。地域からの信頼があってこそ、事業は継続し、次の成長へとつながります。この考えは、今後も変わることはありません。

神戸市（兵庫県）や和泉市（大阪府）、伊賀市（三重県）のサッカーチームへの支援をはじめ、各事業所が拠点を置く地域でスポーツ振興や地域活動への参画を長年続けてきたことも、こうした関係構築の一環です。地域が元気でなければ、その地に根ざす私たちも成長できません。当社グループは今後も、地域とともに発展する企業グループであり続けます。

M&Aでグループを拡大させ 動静脈連携の中核へ

2031年3月期の目指す姿に向けて、中期経営計画「D-Plan 2028」は、2026年3月期からの3年間で飛躍に向けた基盤を整える計画です。そしてその後の3年間でグループの成長を加速させます。大胆な設備投資を進めてきた結果、初年度の業績は売上・利益ともに過去最高を更新しました。しかし、これはあくまで通過点に過ぎません。基盤整備が進むにつれて、より高い成長を見込めるステージへ移行していきます。

廃棄物業界は今、転換期を迎えています。約12万社が存在する超分散型の市場構造の中で、後継者不足や資金調達の問題を背景に、集約化が確実に進むとみています。当社グループは、焼却等熱処理施設や最終処分場といった参入障壁の高い施設を多数保有していますが、こうした施設を持たない事業者にとっては、事業継続が難しくなりつつあります。そうした事業者が当社グループに加わることでシナジーを見込めるのであれば、積極的にM&Aを進めていきます。

廃棄物業界の健全な発展のためには、静脈企業と動脈企業とが率直に議論し合える関係を築くことが不可欠です。当社グループは、社会的な信頼を長年積み重ねてきました。この信頼の蓄積があるからこそ、動脈企業とも対等なパートナー関係を築きつつあります。M&Aでグループ拡大を加速させ、事業の成長と同時に、発言力を持つ企業としての立場を確立し、業界全体の持続的な成長に貢献していきます。

従業員と共に目指す未来

当社グループは創業時から、経済合理性だけに囚われることなく、一貫して環境に配慮した事業を進めてきました。現在は、公民連携による一般廃棄物と産業廃棄物の一体的な処理を進め、地域における資源循環の仕組みそのものを変革することに挑戦しています。その実現には、人財の確保と育成が欠かせません。待遇を含めて働く環境を整え、誇りとやりがいを持って働ける仲間を増やしていきます。

一方で、7月に当社施設内で発生した事故により、尊い従業員の命が失われました。亡くなられた方に深く哀悼の意を表するとともに、ご遺族ならびに関係者の皆さまに心よりお詫び申し上げます。再発防止に向け、安全管理体制の見直しに全力で取り組んでまいります。

当社グループは、すべてのステークホルダーの皆さまに「関わってよかった」と思っていただける存在を目指し、持続的な成長と安心して働ける環境づくりを進めてまいります。